

# 歴史探訪

## クラブ

其の  
104



History Inquiry Club

文化財課 ☎23局 3635

FAX 22局 3811

### 里に咲くヒガンバナ

9月の秋分の日を含めた連休を心待ちにしていた方も多いと思いますが、私には休みのほかにも楽しみがありました。それは、この時期にヒガンバナが咲くからです。

ヒガンバナは、中国原産の多年生植物で、彼岸の日のある毎年9月下旬から10月上旬に咲きます。花が散った10月下旬から翌年の5月にかけては、細長い葉を地面いっぱいに広がっています。そして夏の間は葉を落とします。9月下旬の開花をじっと待つのです。



▲鮮やかに咲くヒガンバナ(大久保町・10月上旬撮影)

草むらや田畑のあぜに、ひよろつと伸びた花茎に鮮やかな花が咲くその姿は、緑色の草と赤色の花とのコントラストも美しく、里に咲く季節感あふれる花の一つではないでしょうか。

その一方で、ヒガンバナは好き嫌いが分かれる花です。新美南吉の『こんぎつね』にも、墓場の場面で登場するので忌み嫌う人もいます。球根の毒性を知る人はなおさらで、その毒は想像以上に強く、口にすると中毒死する危険があります。しかし、球根には豊富なデンプンが含まれて



▲冬支度の葉(大久保町・10月下旬撮影)

いるため、古代から十分に毒抜きを行い、食料として利用されてきました。

「歴史探訪クラブでなぜ、花の話？」と思う方がいるかもしれません。日本のヒガンバナは、種子をつけられないため球根の増殖でしか増えません。つまり、日本全国各地に分布するヒガンバナは、人の手によって運ばれ、人々のくらしに古くから結びついてると考えられるのです。

愛知大学の有蘭正一郎ありそのさんは、ヒガンバナの分布と集落が成立した時期との関連性を調べ、「水田稲作農耕文化を構成する要素の一つとして、縄文晩期に中国の長江下流域から日本に直接渡来した」という説を発表しています。渥美半島も調査され、成立期の古い集落ほどヒガンバナが多く、また

海浜部には少ないことが確認されています。しかし縄文時代の遺跡周辺には少ないの

で、渥美半島では、縄文晩期に伝わった初期の水田稲作の文化は定着せず、その後に水田稲作が定着した古い集落にヒガンバナが自生したといえるのかもしれませんが。現在の渥美半島では、大久保町、野田町、山田町などの集落で大きな自生地が見られ、ほのほとした秋の風景に色を添えています。

農村の風景として欠かせないヒガンバナ。工事地内にヒガンバナがあると、工事終了後にその球根を元に戻すという取り組みもされているようです。古くは食料として運ばれたヒガンバナですが、今後は私たちの生活の中で、心やすらぐ植物としてお付き合いが続いていくことでしょう。(増山)

### 今月の「表紙」

▼サンテパルクたはらで開催された渥美半島菊花大会。この日に合わせて咲くように、手塩にかけて育てられた菊は見事の一言につきまます。台風18号の被害をまぬがれて咲き競う菊を見て感じた、日ごろから準備することの大切さ。わが家でも、防災への備えをもう一度確認しようと思えました。(〇)

【表紙の写真】渥美半島菊花大会